

平成艸紙



おりおりの記

兜町の氏神様

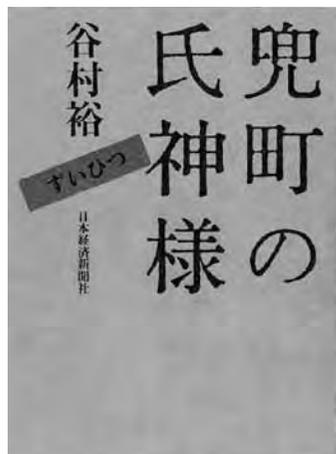
日本証券業協会
副会長・専務理事

岳野 万里夫

読書については「趣味の範疇に入らない」とか「投資活動そのものである」といった熱い論争があるが、私の場合、いわゆる「積読」派である。新刊・古本、旅行先で出会う歴史文化関連の小冊子、知人の自費出版等の中で興味を持ったものは、とりあえず入手して書棚に収納してきた。家中に溢れる本に対し家族から「断捨離」を求められているが、趣味を通り越して生き甲斐に近くなっているのだからなかなか止められないでいる。

積読は人生を豊かにすることを物語る格好のエピソードをご紹介させていただく。

3年前の春に兜神社例大祭に初めて参列させていただいたが、その時、遠い記憶の中から『兜町の氏神様』が鮮明に蘇って来た。これは谷村裕・東証理事長（故人）が昭和55年に日本経済新聞社から出版された本である。当時、御縁があって手にしたものの題名がピンと来なかったので頁をめ



くることはなかった。しかし処分せず大切に書棚の奥にしまい込み、そのまま40年近くの歳月が経過していたのである。今は座右に置き、機会がある度に頁をめくっては新

たな発見と刺激を受けている。

一方で、このところ、長年の積読人生もそろそろ曲がり角を迎えつつあると感じている。

日本証券業協

会ではSDGs推進の一環として貧困の子供達の生活支援を行うため、昨秋から内閣府の「こどものみらい古本募金」へ参加することを決めた。賛同いただける証券会社の店舗と協会事務局に「古本回収ボックス」を設置して協力を呼び掛けているのだ。

私も心底から趣旨に賛同しているし、また、蔵書が過飽和の状態になっているので積極的に協力したいと思っている。さらに、これを契機に蔵書を整理することまで考えるようになってきた。ただ、処分する本を具体的に選択する段になると「これも『兜町の氏神様』のような展開があるかもしれない」と思い迷って、決断が鈍りがちである。

4月1日に平成最後の兜神社の例大祭に参列する機会に恵まれれば、新元号の時代における証券界のさらなる発展を祈願するとともに、私事ながら積読人生の終活も密かにお祈りすることになりそうである。

